

紫芳会だより ～輝く先輩達～

岩波書店 辞典編集部 副部長

## 平木 靖成氏 (高校39期)

No.56  
2017.5.1.発行



1992年東京大学教養学部教養学科中南米科を卒業。同年岩波書店に入社し、翌年から辞典編集部。現在、同副部長。

『広辞苑』『岩波国語辞典』『岩波キリスト教辞典』『岩波世界人名大辞典』などの編集に携わる。辞書編集を舞台にした小説『舟を編む』(三浦しをん著)の取材を受け、同作の映画化・アニメ化にも協力。

写真は39期生卒業30周年記念イベントで講演する平木氏。

中学・高校生のころ、『百万人の英語』という民放のラジオ英語講座を毎日聞いていた。

ビリー・ジョエルという歌手との出会いは、その番組中の、毎週土曜日、洋楽を題材にした講座でのことだ。「グッドナイト・サイゴン」という、ベトナム戦争での兵士の寂しさとやるせなさ恐怖、戦友との連帯感を歌い上げる歌が取り上げられ、また初めて歌詞が韻を踏むというのも知ったこの曲から、ビリーにハマった。

LPLレコードを次々と買い込み、できるだけ発音をまねして一緒に歌い、息継ぎの場所から掛け声のタイミングまですべて覚えようとした。歌詞を英和辞典と首っ引きで解説し、今でも“ビリー・ジョエルで覚えた”と言える単語がいくつも記憶に残っている。

やがて、ピアノ譜を買ってビリーのピアノ弾き語りを自己流でまね始めた。さらにはハーモニカを吹きながら歌う曲「ピアノ・マン」をやりたくて、楽器を買い込んで練習した。高校1年のとき、音楽の授業の発表では友達2人と組み、それぞれがメインボーカルをつとめる3曲を演奏。当然自分はピアノとハーモニカで「ピアノ・マン」を歌った。今考えると赤面、噴飯ものだが、楽しかった。

ビリーには「愛の面影」というフランス語の歌もあり、これも歌いたかったし原語の歌詞も読みたかった。そこで、高2のときにNHKラジオ講座でフランス語を始めた(洋楽とはまったく無関係に、高1のときに中国語講座を始め、高校の第2外国語は中国語だった)。その流れで、大学の第2外国語もフランス語を取るようになった。

一方、英語が主流の洋楽の中で珍しく、その頃、ドイツ語でネーナの「ロックバルーンは99」という歌が世界的にヒットした。今でもドイツで“典型的な反戦歌”として歌い継がれている曲だが、当時はメロディーしか知らなかった。「グッドナイト・サイゴン」という社会的メッセージの強い歌からビリーに入った自分が、もしこのとき「ロックバルーン」の歌詞の意味を知ったら、ドイツ語を学び始めていただろうか。

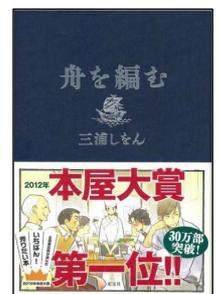
大学では結局、軍政下で民主政治を求める闘いにひかれてラテンアメリカを専攻した。いきなり受けたスペイン語だけの授業など辛かったが、短時日である程度スペイン語を使えるようになったのは、同じロマンス語系のフランス語の下地があったからだろう。この時点で、もしフランス語でなくドイツ語しか知らなかったら、スペイン語へと足を踏み出すのを躊躇したかもしれない。するとラテンアメリカとの出会いはなかったはずだ。その代わりに、ゲルマン系言語を通して出会う別の世界があったらどうか……。

趣味にせよ、学びにせよ、友にせよ、本にせよ、その時代における出会いは一度しかなく、取り換えがきかない。現在携わっている仕事は、一見すると音楽ともラテンアメリカとも無関係だが、しかしあとから振り返ると、出会ってきた要素がそのかけがえのなさの故に、今の自分に向かって、星座のごとく不思議につながりあっているように感じる。

目の前のことを一生懸命、真面目にやるしかないのだと、この年齢になってあらためて思う所以である。



平木氏が編集に携わった岩波書店『広辞苑』



平木氏が取材協力し映画化・アニメ化もされた三浦しをん著『舟を編む』



文庫版は平木氏が解説を執筆